

ネット 漂流

狙われた子どもたち

Vol.67

小中学校に配布された タブレットの現状



NET情報技術推進ネットワーク株式会社
篠原 嘉一（しのはら・かいち）

GIGAスクール構想として、一人1台のタブレット配布が数年かけて行つと計画されていたが、コロナの影響から前倒しで進められた。学校によってはWIFI環境の整備や設備工事が行われ、今年度からはほとんどの学校で一人1台のタブレットが動き始めた。

もともとは、ハード面とソフト面をすり合わせて準備をしていく予定だったと思うが、コロナ休校が影響し、リモートで使えるようにと、納品が早められてしまい、ソフト面の学習アプリや情報モラルの教育が後回しになってしまった。何より、教員に対する支援が不足しており、どう活用していくのが、明確に伝わっていないように思う。理想的な活用方法は描かれているが、子どもたちのネットレベルの現状に一致していないため、トラブルが先行しているように感じる。

幼い頃からスマホやネットゲームを経験してきた今の小学生は、タブレットが渡された日から操作自体には問題なく対応できてしまう。学校やエリアごとに機種は違うが、おおよそ自宅で使用してきた機器と同じように

扱ってしまうのだから、先生方が説明する前に触り始めてしまう。タブレットを「何のために使用するのか」を、まず強調しておかないといけなかったが、「まずは触ってみましょう」とスタートした学校は想定外の使用をしてしまっている。

本来、学校のタブレットは教習所内だけを走る教習車と同じで、決められた範囲のインターネット上で経験を積み、使うアプリやソフトウェアに合わせてインターネットという路上に出るのが理想的だが、子どもたちは上手に路上に出てしまった。トラブルの事例では、ある方法を使い、フィルタリングを回避してブラウザーを思い通りに使うトラブルだ。

個人で使用するスマホでも、購入時は電話会社の許可したアプリしか入っておらず、見ず知らずの人とつながるSNSは購入後にダウンロードして自分の意思でインストールしなければ使えない。だから、何のアプリも追加していない人はほとんどトラブルに遭わない。学校のタブレットも教育委員会の許可したアプリやソフトウェアしか入っていないのだから、安心できるはずなのだ。

しかし、思うようなアプリが入っていないのだから、何としても使いたいアプリをインストールできないかと試みる生徒がいる。「使わない！使わない！」と制限をかけることはできるが、それではGIGAスクールの意味がない。

やはり、手渡す前に「して良いことと、できることは違う」と情報モラルを先行しておきたかった。学習アプリをタブレットなしの状態の説明し、アプリの目的とその効果を十分に生徒が理解してから渡せば、何のためにタブレットを使うのが明確になる。だが、多くの学校では、まず自宅でWIFIにつながるかを試すために持ち帰らせた。つながることがわかれば当然検索をする。その履歴から、興味のあるサイトは次々とお勧めされて表示される。自宅でリモート学習を最優先で考えた結果、カメラ機能とリモートアプリは動いてしまうのだから、持ち帰りが進むと、友達とZoomやMeetで一晩中話し込んでしまう生徒もいる。テレビ会議アプリを使いながら、もう一方ではゲーム機で対戦し、スマホのLINEでもメッセージのやりとりを同時にしている。学校のタブレットだけで何かをするわけではない。あらゆる端末を同時に使い、YouTubeを見ながらZoomをしたり、ゲームをしたりしながらLINEをする。これまで以上に使い方のレパートリーが増えてしまった。いったん持ち帰りを中止した学校も多いのが現状だ。

「何のために」と目的を明確に伝え、どんな使い方ができるのかを子どもたちから教えてもらわないと、イタチごっこで終わりがけない。